



2019年度
入所・入職式にて

機微に 聴く 施設長 貝沼 寿夫

新しい時代、新しい年度を皆様のお陰で迎えることができました。今年は、4名の職員と1名の利用者の新たな仲間と共にスタートしました。どんな1年になるのか、ワクワクしています。

先日、10数年ぶりに車のディーラーを訪れ、様々な機能の進化に驚きました。障害物を認知すると止まってくれる、レーンを外れると知らせてくれる、一定速度でハンドル操作もなく走れる等々。近い将来には、運転免許証は必要なくなるのではないかと、そう思われました。

私たちの仕事の中でも、AIを活用しています。様々な勤務形態があり各職員の事情もある中、1か月の勤務表を作成するには、数時間要します。今年度より専門のソフトを導入することにより数十分ほどで勤務表を完成させてくれます。その短縮した時間を、よりサービスに注力すること、労働時間の削減や有給休暇の取得率向上に繋げることが可能になりました。

このようにAIやロボット、コンピュータの進化には目覚ましい物があります。AIは、莫大なデータから瞬時に答えを導き出すことが可能です。これらのお陰で今存在する仕事の半分は無くなってしまっても予測されています。

これは私個人の意見ですが、この支援と言う仕事は、決して無くなることは無いと確信しています。相互に人が人を支援しあ

う私たちの仕事は、過去のデータをどれだけ積み上げて、AIやコンピュータを通して正解は得られませんし、人同士の関係性が重要な要素である為そもそも正解も存在しません。人には、それぞれそれぞれの環境や経験から様々な願いや思いを持っていると思います。言葉に出し表現することが苦手な知的障害者である目の前の利用者が、今どんな気持ちでいるのだろうか？この瞬間や未来にどんな思いや願いを馳せているのだろうか？これらを理解するには、人と人とが真正面からぶつかり、繋がり、分かり合える経験を積んでいく。そして知識や経験・技術を高めつつ、自分や周りを大切に、想像力を働かせて考え、AIなどにも頼らずに、自分で答えを導き出す力が、必要です。これは福祉だけの話ではなく、今後どんな世界でも必要不可欠になっていくのではと感じています。

目の前にいる利用者や顧客、同僚・部下などの仲間の表情や雰囲気・態度や言葉などでは理解できない微妙な心の動きや思い・願いを感じ取れる機微に聴い人しか、この変化の激しい世の中では、生き残っていかなくなるかもしれません。

これから先10年20年30年と末永くこのライフパートナーこぶしが利用者・ご家族・地域の皆様・働く仲間にとって、存在価値の高い施設としてあり続けられるように、機微に聴い集団でありたいものです。



“ねえねえ、きいて”

<高野 奈々>

職員のユニフォームのボタンが取れてしまっていたことを、ずっと気にされていたAさん。着脱に影響がないボタンだったため、手が空いたらつけようそのままにしていたら、ある日の休み時間にAさんに「針と糸貸してください！」と言われたので貸し出すと「ほら、脱いで脱いで！パパッと縫っちゃうから！」と私のユニフォームを引っ張って頼もしい一言。何年振りか分からないくらい久しぶりに、人にボタンをつけて貰えました（笑）
Aさんありがとう。

<鈴木 麻椰>

毎週月曜日に行われている、学習プログラムに参加しているBさん。以前2か月ほどプログラムに入れない事があり、久しぶりにプログラムに入ると、「食べ物」と「乗り物」に分ける事が苦手でしたが、正確率が上がっていて、続けてきて良かったと嬉しく思いました。

先日の土曜日にCさんを連れて理容室に出掛けました。行きの道中で、歩いてきた親子にCさんがお子さんに向かって手を伸ばし、お子さんも「えへ！」と笑いかけてくれました。職員やご利用者との関わりが多い中で、Cさんが自ら発信した嬉しさと共に、その光景を見て心がほっこりしました。

出来た！瞬間

毎週火曜日は健康促進日です。私はその中で午後のサーキット活動を担当しています。サーキット活動では、メダル探し、ミニハードル、紙風船落とし、魚・果物釣り、旗上げ、トランポリンなど様々な種目を取り入れて行っています。

紙風船落としでは、「う」の口を作り、「ふーっ」と息を吹くのが難しく、初めは太いストローを使用して、みんなで練習をしていました。週に1回の活動ですが、1年経つと、ストローを使用せず、上手に「ふーっ」と息を吹けるようになりました。出来た瞬間は嬉しく、ご利用者と笑顔でハイタッチ！ストローを使用して口の形を練習したことや、飽きてしまわないように、風船を食べ物の紙風船やイラストの的に変えてみるなどの工夫も「出来た！」に繋がったと思います。

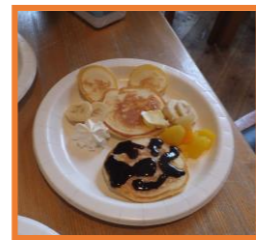
今後も楽しく体を動かし、工夫を取り入れながら、「出来た！」をご利用者と一緒に積んでいきたいと思っています。

生活支援員 矢部 帆乃

写真についてはご本人（代理人又は成年後見人）の同意を得て掲載しております。

フォトニュース

おやつ会 ～パンケーキ作り～



わかろうとする

ときどきふと思い出すことがあります。それは高校3年生、人生の決断を迫られた時のことです。迫られた、なんて言うと何だか自分でやりたいことを決められていないような誰かにやらされているような言い方になってしまいますが、当時は強くそう感じたのを覚えています。

私は児童養護施設で育ちました。ご存知の方もいらっしゃるかと思いますが当時は高校卒業と同時に退所が決まっていた、考える暇も無く人生の決断をしなければなりません。その時期に周りから色々なことを言われた私は、これからの人生に絶望したような感覚になり、とても落ち込んでいました。

そんな私を前向きにしてくれたのは高校1年から担当していた職員でした。その職員は反抗期真最中の私をわかろうと色々な働きかけをしてくれました。施設で殆ど話をしなかった私は、自分でも気が付かないうちに話をするようになり、その職員の夜勤日には夜中まで職員室に入り浸るようになりました。

そのように変わっていったのは、職員が私をわかろうとする態度を見せ、関わってくれたからなのだと思います。

人生を生きやすく、より良いものにするためには、わかろうとする・わかってもらえた、のやり取りの循環が必要なのではないかと常々感じることもあり、そう感じられるようになったのもその職員のおかげであると、とても感謝をしています。

少し前の話になりますが、当時入所された利用者の方で支援者に対し唾を吐きつけることや髪の毛を引っ張ること、そうした行動が多く見られた方がいらっしゃいました。今では唾を吐きつける代わりに「〇〇さん！」と親しみを込めて名前を呼びます。髪の毛を引っ張る代わりに支援者に腕組をし「だーい好き」とポジティブな関りをします。そのように変わっていったのは、わかろうとする・わかってもらえた、のやり取りの循環が上手くいったからなのだと思います。

これはほんの一例ですが、こんなやり取りの循環があらこちらで見られるようになりました。それは、利用者さんと支援者の間だけでは無いように思います。支援者と支援者との間でも同じように循環しているようです。

日々が過ぎていくことに流されてしまいがちなのですが、そういう時にこそ相手に関心をもって“わかろうとする”ことを怠らないようにしたいと思います。そしてこの4月から新たに迎える支援者とも、そういった良い循環ができるように関わっていきたいです。

サービス管理責任者 坂口 麻衣子

～ お知らせ ～

次の通りご寄附をいただきました。

ライフパートナーこぶし保護者会

保護者

- ・桜もち
- ・紅白まんじゅう
- ・寄附金 5万円

- ・寄附金 5万円

桜もち・紅白まんじゅうを皆さん嬉しそうに召し上がりました。
寄附金は大切に使用させていただきます。
ありがとうございました。

こころ踊るカレー

3月、某界隈で人気のカレー屋でイベント出店のボランティアをした。今年のやりたい事リストの中でも上位の1つだった。目的は、あくまでも賄いのカレー！当日、まごつく私に店主とベテランボラはあくまでも自然体。はじめから終わりまで自分のペースを守らせてくれた。中堅職員としての立場の今、とてもスパイスの効いた日となった。加えて、この店が更に好きになり、2皿分食べたカレーが美味かったのは言うまでもない。

またこの季節がやって来た、春はスーパーボールのように心弾む。新しい仲間を迎え入れる準備が整った、そんな事を思った。職員一人一人、自分にしか出せず付加価値となる“かくし味”をやったる課（働き方改革プロジェクト）では見出し応援していきます。こころ踊るカレーをエネルギー源に変えて。さあ、はじまるよ！2019年のライフパートナーこぶしどうぞご期待下さい。

生活支援員 山賀 真実子